

受付番号

16

承認番号

大歯医倫 第 110894 号

研究課題名

健常有歯顎者における咬合面側刺激による歯根膜触・圧覚閾値の基準範囲の設定

研究責任者

田中 昌博

申請者

神田 龍平

研究終了日

平成 30 年 3 月 31 日

所属

有歯補綴咬合学講座

所属

歯学研究科 有歯補綴咬合学専攻

職名

主任教授

職名

大学院 1 年生

申請の概要

歯科疾患には、鑑別診断の困難なものが存在する。その一つに咬合違和感症候群（Occlusal Discomfort Syndrome、以下 ODS）が挙げられる。ODS は咬合時の違和感を主訴とすることが多いものの、その症状は多様である。その症状および病因の多様性から、ODS の診断には器質的検査および知覚的検査が必要であると考えられる。しかしながら、知覚的検査の種類および方法に関する報告は少ないのが現状である。

われわれは、これまで咬合接触像に異常を認めず、咬合違和感を認めない健常成人有歯顎者において、唇・頬側からの刺激における歯根膜触・圧覚閾値の基準範囲を設定し、その基準範囲を用いることで咬合違和感患者の知覚異常を検出してきた。しかしながら臼歯部では、唇・頬側からの刺激よりも咬合面側からの刺激が、実際の機能時に近い感覚を反映すると思われる。咬合違和感のより正確な診断の為には、臼歯部での咬合面側からの刺激における歯根膜触・圧覚閾値の基準範囲の設定が必要である。

そこで、本研究では、若年成人 150 名に対し、アンケート調査によるスクリーニング、咬合接触像の観察各段階によって被験者を選定していき、最終的な被験者として矯正治療の既往がなく、咬合接触像に異常を認めず、咬合違和感を認め

ない、個性正常咬合を有する若年成人健常有歯顎者を選定する。最終的に選定された被験者において、臼歯部咬合面側からの刺激による歯根膜触・圧覚閾値を測定し、基準範囲を設定する。

臼歯部における実際の機能時に近い咬合面方向からの刺激による歯根膜触・圧覚閾値の基準の設定が、ODS の病因の把握を可能とし、診断の一助となると考える。それにより、これまで ODS 患者が訴えるままに治療を行うことで生じていた過剰診療を抑制し、付随する医原性疾病の発生の予防が可能になると考えられる。